



長崎大熱帯医学研究所教授

山本 太郎氏

コロナ禍 情報が力持つ時代に



人類は幾度となく感染症の脅威に直面してきた。グローバル化が頂点に達したなかで起きた新型コロナウイルスの災禍について、「感染症と文明」などの著書がある山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授は、情報パンデミックを併発した新たなパンデミックとみる。

厄災とか飢饉（ききん）とか疫病とか、人口学的にも大きな影響をあたえるイベントは、社会に大変革をもたらす力がある。パンデミックもそのひとつ。中世ヨーロッパでペストが大流行した時、宗教から国家に主体が移った。新型コロナ禍では、情報技術がすぐ力をもつ世界がコロナ後に実現するだろう。

今回は現代的なパンデミックである。亡くなる人の数というより、そういうことが起こりうるということ、世界でみなが刻々とウオッチする。それがまた変革を促す。感染症と情報の

パンデミックが合わさって社会変革になる。

変革の方向性は両義的で、急激な技術革新は常に予想できず、よい面も悪い面も出ず。監視を含めた分断的な社会へのツールとして使われるのか、社会が連帯するためのツールに使われるのかは大きな挑戦となる。

近代が終わった後に実現している時代から今を振り返ると、コロナ禍で技術が力を持つ時代に移行したといえるだろう。

近年の情報技術の革新はめざましく別社会になりそうな予感。コロナ以前にあった。コロナの出現でテレワークが広まった。こうした技術が社会に浸透していくのは間違いない。

長い人類の歴史でみるとパンデミックは何回もあり、感染症を集団として免疫をもちながら取り込んでいった。

感染症をくぐり抜けた文明の方が未経験の文明よりも強いが、多くの犠牲も払ってきた。今はこの犠牲を最小限に抑えるよう持っていきたい。ウイルスの存在すら知らなかった100年前のスペイン風邪に比べ、科学や医学という手段を持つのも事実だ。（編集委員 矢野寿彦）